

基幹共同研究

地域統合情報発信の開発

地域統合情報発信の新段階 COEの成果を踏まえ

橋川 俊忠（非文字資料研究センター 副センター長 / 研究班代表）

● 成果と反省点

福島県奥会津の只見町を舞台にした地域統合情報発信の試みは、COEの研究プロジェクトの一つとしてはじめられた。その狙いは、現代の発達したIT技術を利用して、一定の地域に存在する文化情報をネット上で、統合された情報として発信することにあった。COEの最終年度にネット上に公開した「福島県只見町エコミュージアム」が、その成果の一部である。一部というのは、統合情報発信としては未完成であり、当初予定した結果にまで到達していないということである。その理由は、情報発信のために収集したデータを活用し切れていないということ、構成の面でも不十分な点が残されていることである。その点、まず、データの提供・収集にご協力いただいた只見町役場および町民の方々にお詫びしなければならない。そうした面を踏まえ、今回、非文字資料研究センターの発足とともに、継続して地域統合情報発信というテーマで研究プロジェクトに取り組むにあたって、まずCOEでの研究の総括を行っておく必要がある。

COEでの発信が未完成にとどまった原因はいくつもあるが、そのうち主なものを挙げれば、アイデアあるいは

は思い付きが先行してしまったこと、統合すべき情報についての限定がなされなかったこと、統合のための情報の体系化が不十分であったこと、情報技術の特性を理解し、それを使いこなす力量が研究者の側になかったこと、費用の積算が十分ではなく、予想外に費用がかかったこと、などである。

のアイデア先行は、ある意味では当然である。新しい試み始める場合、まず自由に発想して出来る限り内容を豊かにしようとするのは悪いことではない。問題は、アイデア倒れになる危険を常に自覚しているかどうかである。COE時点での研究班にはその自覚が不足していたということである。

次に についてであるが、統合すべき情報については二通りの考えがあった。一つは、COE全体の研究方針に合わせて、画像、身体技法、環境・景観の三つに絞るという考えであり、もう一つは、一つの地域のすべての文化情報を統合するという考えである。COEの一環であるということからすれば、当然前者ということになるが、調査・研究を地域との連携の下に進めていくとなれば、必ずしも前者に限定することはできない。地域からの要望・期待に応えるという側面も無視しえないし、研究者の側が、地域を単なる研究対象として見ればよいともいえなからである。結局、この問題は、COEの期間中解決することは出来なかった。

さらに、 については、最も反省を要する点であるが、結局情報の取得・収集が先行してしまい、収集した情報を利用できなかったのもこの問題にかかっていた。只見町の場合、立派な町史が刊行されており、国の重要民俗文化財に指定された民具も含め、只見町の文化情報はかなりの程度整備されており、そのデジタル化、体系化（関連付け）発信方法の開発が主要な課題になるはずであった。途中での修正を予定した上で、最初の段階である程度の体系化を行い、発信する情報の構造・プログラムを作成しておかなければならなかったにもかかわらず、それが極めて不十分であったことを認めざるをえない。したがって、デジタル情報の取得も体系的にはなく、手



当たり次第に取得するという印象をいなめなかった。

については、研究班員の勉強不足といわれても仕方がないが、IT技術者とのコミュニケーションがうまくいかなかったこともその一因である。そのため、研究全体が技術に振り回されるような印象を与えることになってしまった。の問題もと同根である。COEの最終段階にいたって予算不足が露呈し、当初予定したアイデアの実現が困難に陥ってしまったことは痛恨の極みである。

以上のように、COEにおける地域統合情報発信は、重要な問題を抱えたまま、不十分な形でしか実現できなかったが、予算と能力の限界の中で、IT技術を利用した地域文化情報の発信の一つの可能性を示したという意味では、それなりの役割を果たしたといえてよいであろう。

● 課題の再設定と展望

今回、非文字資料研究センターの研究プロジェクトの一つとして地域統合情報発信に取り組むことになったが、その場合、COE段階とは異なる点は、統合すべき情報についての制約がとれたということである。地域にある様々な文化情報を自由にに取り上げ、IT技術を駆使して、地域そのものをどのように表現できるかということに目的を再設定して、広い意味での地域統合情報発信に取り組むことができる。COE段階で、デジタル情報として収集したが、エコミュージアムの情報体系に組み込むことが出来なかった情報を新たな構想の下に組み込むことが、このプロジェクトの最初の作業になることはいうまでもないが、その場合COE段階の反省に立って、全体の構想を策定し、その中のどの部分を実現していくのかを常に意識しながら作業を進めていくことになるであろう。

さらに、IT技術の特性は、すでに指摘されているように、「博物館と図書館を結合できる」という点にあるとすれば、非文字資料と文字資料とをどのように結合するのか、という点も課題となる。そのことによって「デジタル・エコミュージアム」として発信する情報に奥行きと深さを与えられるだけではなく、研究と情報発信とが新しいレベルで結合する可能性が開けるはずである。

もう一つ、今回のプロジェクトで取り組むべき課題は、時間軸をどのように取り込むかという問題である。いうまでもなく地域の現在は、現在としてのみ存在しているのではなく、過去の歴史の積み上げの中で存在している。歴史的な文脈を入れることによって、現在存在しているものの意味が確認できることも少なくない。とくに文化に関わる領域ではそうした性格が強いといえてよいであ

只見町の古地図



重要文化財五十嵐家住宅の内部

ろう。その意味で、時間軸を情報体系のなかにきちんと組み込むことは不可欠な作業であるといえてよいであろう。具体的には、古地図、古写真、絵図などを利用して、地域の変遷を明確に描き出すことなどが課題となるであろう。また、時間軸を挿入することによって、一つの地域とそこを取り巻く地域との交渉の過程を考察の対象とすることも可能になることも指摘しておきたい。

ともあれ、COEに比較しても予算規模も人員も少なくともならざるをえない状況において、どこまで実現できるのか心もとない点もあるが、もともと地域情報発信という事業は終わりのない継続的に発展させていかなければならない事業である。今は、その事業を粘り強くどのように継続させていくことができるか、その点に絞って条件作りを図る段階と考えている。